高校教育最前線！

探究学習の現場から

第7回 東京都立松が谷高校

▶設立：1981年　▶種別：全日制／普通科／共学　▶生徒数：1学年約320人
▶普通科（6クラス）に加え、外国語コース（2クラス）を設置。実践的な英語運用力の向上、国際理解教育に力を入れる
▶2021年度合格実績 ： 桜美林大、明星大、帝京大、専修大、日本大、杏林大、法政大、東洋大、亜細亜大、東京工科大、東海大、武蔵野大、国士舘大、獨協大、高千穂大などに延べ451人が合格

自分だけの〝問い〟を探究し「とりあえず経済学部」という進路選択から脱却

3学年担任 探究担当
浅野 恭子
あさのきょうこ●公立中学校、都立高校で勤務し、2018年度から探究活動に取り組み始める。担当教科は英語。

〝やりたいこと〟に気づく体験の場としての探究

ここ数年、進路面談で「何をやりたいのか、わからない」と話す生徒がめだつようになっていました。中には「やりたいことはないから、とりあえず経済学部に行く」と言う生徒もいます。やりたいことがないと進学先は、偏差値と知名度で決めるしかありません。

そもそも〝やりたいこと〟とは自分の体験の中から生まれてくるものです。また、自分が好きなこと、関心があることは、異質な他者との関わりの中で自覚しやすいものです。ところが、今の生徒たちはコロナで活動が制限され、他者との関わりも、仲のよい生徒とのSNSでのコミュニケーションが中心。スマホの中で、全てが完結しています。

そこで私は、探究活動を通じて自分なりの体験を積んだり他者と関わったりする中で、生徒が自らの興味・関心を発見し、そこから進路を考え、面接で自己アピールできるようにしたいと考えたのです。

新しい取り組みであり、初めは手探り状態でした。研修があるわけでもなく、公立なので予算もない。さらに、教員はどうしても「教えなくては、直さなくては」という意識になりがち。でも、それでは生徒自身の探究にはなりません。1年目は試行錯誤しながら個人探究に取り組ませましたが、「単なる調べ学習で終わってしまう」という課題も見えてきました。

生徒の問いづくりに伴走 悪戦苦闘の日々

どうしたら生徒自身が問いを立て、解決に向けた調査・発表ができるようになるのか？　2年次の取り組みを考えるために、研究者が書いた本を読み、探究学習に関するセミナーにいくつも参加しました。その中で、たまたま近隣の桜美林大学が探究学習をサポートしていることを知り、担当者に相談。まずは同大学の*「ディスカバー！」プログラムを活用することにしたのです。

このプログラムのよさは、SDGsやディズニーなど、高校生が飛びつくようなテーマがあらかじめ用意されていること。問いづくりに苦労することなく、「みんなで考え、活動する」という探究の〝おいしい部分〟を体験できました。

高2の2学期からはいよいよ2回目の個人探究に取り組みます。難しいのは、やはり問いづくり。「好き」という観点だけで考えさせると、「なぜタレントの○○くんはかっこいいのか？」というものになりがちです。「課題解決に関係ないよね」「この問いは、もう答えが出ているよ」といった指導の言葉をグッとこらえ、彼らの話を根気強く聞いて質問する面談を繰り返し、自分なりの切り口を考えつくまで伴走しました。

問いが決まってからの探究活動では、自分でアンケートを取ったり、インタビューをしたり、実験したりといった「自分だけの体験」を求めました。中には果敢に大人に取材やアンケートを行う生徒や、地域のボランティア活動に参加した生徒もおり、コミュニケーションの相手や手段が多様化していきました。

最後はこれらの成果を論文にまとめますが、そのうち優秀な論文については大学の先生や大学院生に読んでもらい、各生徒に講評を直接返してもらいました。生徒にとっては自己効力感を高めるよい機会になったようです。

成績だけで決めない進路指導へ

少しずつ、生徒の進路意識が変わってきています。2年次の面談で「やりたいことがないから経済学部に」と話していたある生徒が、「速く走る方法」を研究したことをきっかけに、シューズメーカーへの就職を希望。今はその道につながる学校への進学をめざしています。

とはいえ、課題もまだまだあります。アンケートで「探究学習が好き」と答えた生徒は半数程度にとどまっています。「発表が恥ずかしい」「問いづくりが大変」など、ネガティブな感想も少なくありません。一方で「探究の経験が将来、役立つと思う」と答えた生徒は94％に上り、調査や発表の経験の大切さを実感しているようです。

しかし一番の収穫は、われわれ教員が彼らの問いづくりに関わる中で、生徒の好きなことや関心事が何かわかり、それらをふまえた成績だけで決めない進路指導ができるようになったことです。これからも生徒が〝本当にやりたいこと〟を自覚し、それを実現するための進路に導けるような、探究学習の形を探っていきます。

＊桜美林大学が提供する高校生のためのキャリア支援プロジェクト

取材・文／本間学　撮影／木藤富士夫

松が谷高校の探究学習 （2020年入学者の例）

内容　1年次は探究の具体的な進め方やプレゼンテーションソフトの使い方を学び、1回目の個人探究にチャレンジ。2年次はまず大学が提供する探究プログラムに参加。2学期から自分で問いを立て2回目の個人探究に挑む。

対象・期間・時数
・全ての生徒が1・2年次に履修
・「総合的な探究の時間」（週1コマ）を活用

体制
・各クラスの担任が面談を繰り返し「問いづくり」に伴走
・「問いづくり」以降の調査、執筆は担任外の教員もサポート

テーマ例 ※2021年度のテーマ（一部抜粋）
列車の乗車率を各車両に分散させる方法は何か？／飲食店においてのレビューの影響／男性のヘアメイクはどのように発展してきたのか　など

評価方法
・グループをつくり、生徒同士で相互評価を実施
・優秀論文に選ばれた論文は、大学教員や大学院生から講評を受ける

林 夏音さん

「投票率の高いスウェーデンの民主主義教育で日本の若者の投票率は10年間で20％上がるのか」を探究

親が政治の話を家庭でよくしていたため、私は以前から日本の若者の投票率の低さが気になっていました。そこで全世代で投票率が80％を超えるスウェーデンについて調べてみると、教育がまったく違うことに気づきました。初めは本で調べていましたが、スウェーデンのことは直接スウェーデン人に聞いたほうが説得力があるだろうと、大使館を訪問して取材も行い、論文をまとめました。この探究を経験してよかったのは、それまでぼんやりとしていた自分の関心が明確になったこと。今は国民の幸福度が高い北欧の国々の社会制度を学べそうな学科がある大学への進学を考えています。探究活動を通じて自分の経験や、やりたいことが言語化できるようになったので、総合型選抜での受験を検討中です。

▲（写真上・左下）優秀論文に選ばれた生徒は、桜美林大学の教員や大学院生の前で発表。（右下）探究学習の体験の場の一環として、地域のコミュニティセンターづくりに参加する生徒たち。

大学への期待

探究支援の窓口や探究プログラムの提供を

大学が求める生徒を送り出すためにも、大学には探究学習での経験が、大学入学後はもちろん、入試でも役立つことをもっとアピールしてもらいたいです。その一環として、探究学習支援窓口の設置やオープンキャンパスでの参加型探究プログラムの実施などがあると、探究学習を進めやすくなります。